

「地球サイズの教育」に期待する

平成 28 年 11 月 18 日

金沢大学教育担当理事・副学長

グローバル人材育成推進機構スーパーグローバルハイスクール特区教育センター長

柴田正良

本学附属高等学校が平成 26 年度に SGH に採択されてから、今年で 3 年となりました。この間、附属高校の皆さんが文字通り奮闘されたおかげで、今年度の中間評価では、全 56 校中第 2 位の評価区分「A」に位置づけられ、個別には「極めて高いレベルで実践が行われており」、「学校全体として教員の協働体制が確立され」ている、との講評も頂きました。まずは、教職員の皆さん、そして何よりも、このプログラムに参加して頂いた高校生の諸君に心から敬意を表したいと思います。これからも、この流れをより確かなものとして頂きたいと願ってやみません。

本プログラムのテーマは、「北陸からイノベーションで世界を変えるグローバル・リーダーの育成」です。このテーマは、附属高校の長い歴史からごく自然な方向性として出てきたものと考えられます。附属高校は、実は 1944 年（昭和 19 年）にわが国で 3 番目に設立された高等師範学校、「金沢高等師範学校」の「特別科学学級」を源流としており、創立以来、社会の様々な分野でグローバルに活躍するリーダーたちを輩出してきました。その附属高校の教育目標には、現在、国際社会や地球生態系における共生者、また個性豊かな文化の創造者を育成する「地球サイズの教育」が謳われています。

しかし、いまやわが国の教育界で声高に叫ばれている「グローバル人材」とはどんな人なのでしょう？ 英語をうまく操り、国際情勢や日本の歴史をよく知っている人のことでしょうか？ いろいろな答えがありうると思いますが、それは、語学力や知識というより、「他者と共生する態度」を身につけた人ではないでしょうか？ つまり、「他者を尊重しながらも自己を主張し、他者と共に良き未来を分かちあおうとする態度」、これこそが大事なのではないでしょうか？ しかも、その「他者」とは、身近な誰かだけでなく、海の向こうで苦しんでいるかもしれない誰か、すなわち「地球サイズの彼方」に存在する誰かのことでもあるはずで

本プログラムで実施された、台湾師範大学附属高級中学の生徒との英語によるディスカッションや、金沢大学留学生を交えた様々なグループワーク、世界の難問となっている「食糧安全保障」に関するグローバル提案などは、附属高校が掲げている「地球サイズの教育」の実り多き未来を感じさせます。それは、高校のグローバル教育において、「偏差値が高いから医学部に」とか、「有名大学だからどの学部でも」といった旧来の

価値観を打破し、自分の本来の個性が求める大学進学を、国境を越えて生徒たちに与えることを可能としてくれるのではないのでしょうか？ 折しも高大接続の新たなシステムが模索されている今日、自ら振り返って、本学金沢大学もまた、その「地球サイズの教育」に応える大学として、不断の改革を実行していかねばならないと考えています。